
	ほっと37号	ホームページ URL https://dokaren.com	
---	---------------	---	---

北海道知的障がい児・者家族会連合会 研修会の記録

研修日時	2022年11月1日(火) 13:30~15:45
研修会場	北広島市芸術文化ホール 活動室 1・2
出席者数	58名(道家連役員15名・家族会関係27名・施設職員12名・特別参加4名)

司会 (北海道知的障がい児・者家族会連合会 事務局長 安田 由美)

開会を宣言。出席された方々への感謝の意を表明。近藤会長に挨拶をお願いしました。

挨拶 (北海道知的障がい児・者家族会連合会 会長 近藤 正)

本日はお忙しい中、多数ご出席いただきありがとうございます。

今回の研修会は、昨年12月に行った勉強会の続編で「看取り支援」をテーマとしています。

北ひろしま福祉会「看取り援助推進委員会」が中心となって実施の運びとなりました。

皆様には多忙な中、準備いただきましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

ありがとうございました。

今、社会全体において高齢化が進み具体的な支援の対応が必要となっております。

知的障がい者支援においても、生活支援・医療支援・看取り支援などの取り組みが大きな課題です。

道家連では「誰もが安心して暮らせる社会へ」という願いを基本活動としており、今回の研修も、

それに沿った内容となっております。

少しでも皆様のお役に立てますなら幸いです。

本日は、道家連役員のほか、家族会会員、施設職員、友誼団体の方々にもご参加いただいております。

➤ 札幌の家族会会員でもある「北海道議会議員 中野渡 志穂 様」にご出席いただくことになっておりますが公務で到着が遅れるとのことでした。

➤ 「北海道保健福祉部保健福祉局 障がい者保健福祉課 主査 中島 佐知 様」

➤ 「一般社団法人 北海道手をつなぐ育成会 事務局長 樋口 賢治 様」

➤ 「きょうされん北海道支部 支部長 清水 道代 様」

皆様の拍手を以ってお迎えしたいと思います。ご出席ありがとうございます。

秋も深まり、朝晩冷え込む日が増えてきております。

新型コロナウイルスやインフルエンザの感染も油断できない状況です。

より一層の皆様のご健康をお祈りして、ご挨拶とさせていただきます。

司会

安田事務局長が、出席されている家族会・所属を紹介。会場から歓迎の拍手。

いよいよ、研修の始まり。小林講師にバトンタッチしました。

看取り援助 実践報告

私たちが目指す看取り援助 ～生ききる「いのち」に学ぶ～

2022年11月1日

社会福祉法人 北ひろしま福祉会 看取り援助推進委員会

北ひろしま福祉会 看取り援助推進委員会 代表の小林悦子です。

我々がどんな活動をしているのか。皆様のところがどのようなことをしていけば良いのか。家族としてどのようなことができるのか。皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

北ひろしま福祉会 看取り援助 推進の歴史

1. 障がい入所施設(居住系)利用者の高齢化が進み、亡くなる方も増えてきました
2. 2014年 特別養護老人ホーム開設「東部緑の苑」
開設時より「看取り援助(看取り介護)」を実施
初年(2014)度 2名を看取りまで援助(総退所者20名)
昨年(2021)度 22名を看取りまで援助(総退所者29名)
開設から8年間(2021年度)まで総退居者178名 93名の「看取りを援助」
3. 障がい分野でも看取り援助への希望が膨らみました
4. 2019年度 入所施設「とみがおか」にて看取り援助を実施(特養のルールを根拠に実施)
5. 2021年度 法人事業計画に「看取り援助」を掲げ 看取り援助推進委員会が活動を開始しました
6. 2021年度(2月) 入所施設「共栄」にて「最期まで」の看取り援助を達成
7. 現在、看取り援助の推進活動奮闘中です!

支援する対象者はどんな人生を歩んできたのだろうか。そのときどんな思いだったのだろうか。家族は支えながらどんな気持ちを持っていたのだろうか。これらのことを知った上で、ご本人の歴史を見て、個別支援計画を作っていきます。

早い時期からご家族と死というものに向き合うという勇気を持ちました。職員にとっても死という話は嬉しいものではない。しかし、そこを避けて通らずしっかり向き合う。死の相談をするのではない。その日までの未来の相談をする。生ききるための家族との相談です。ご本人が最後に何を望んでいるのか。この施設で最期を迎えたいと望むのであれば、そこに真剣に向き合い取り組んできました。

私、小林は以前、東京都で特養の看護職として勤務。そのときに看取りに取り組んだのが今の活動につながる入口となりました。2006年当時、医者はいない特養で人が亡くなるのは多くはないころから施設での看取りに取り組んできました。看取りに消極的な特養もあり、結果、準備がないまま、そのときが来てしまい病院へ搬送して最期を迎えることも多かった。だから、その前に本人・家族とたくさん相談し、叶えることができる望みなら叶えてあげたいという活動をしています。

その点、障がい分野では、まだまだ多くの議論が必要な状況であることは皆様もご承知のとおりです。今後、私たちの活動が皆様方の幸せに役立つよう願いを込めて、ご紹介させていただきます。

特別養護老人ホーム「東部緑の苑」 ～私たち職員 8 年間の取り組み～

北ひろしま福祉社会に初めて特別養護老人ホームを開設。入所基準が要介護 3 以上で生活介護が必要となり自宅での生活が困難になった方への生活全般の介護を提供。認知症が進行し介護度が高くなっても医療行為が必要ない限り長期的に利用することができる施設。「終の住処」として住み慣れた場所で最期を迎えたいと希望される方も多く、介護保険で定められた基準のもと、看取り介護の役割も求められています。入居されているのは高齢者で様々な病気や障がいと向き合いながら生活。治る病気は治療するが治る見込みのない老化からくる病気もあります。

「残る人生を病院のベッドで天井を見て過ごすのではなく生活の場で人間らしく過ごしたい」そんな願いを叶えるため看取り援助を導入し現在に至ります。

初めは死ぬときのことというイメージが強く、医療設備のない介護施設で看取ることなどできるのだろうか。家族も職員も不安で仕方がなかったのが本音です。

自然死、老衰とは、どのような状態をいうのか。旅立つ準備をしている入居者を目の当たりにし「なんで病院に連れていかないの?」「点滴はできないの?」と知識も価値観もバラバラでした。

そこで、私たちは研修や勉強会を重ね、ご家族も職員も一緒に学び、一人ひとりの命と向き合ってきました。何よりも死は生活の延長線上にあり、最期のときだけが全てでないことを学びました。

だからこそ、死が近づいてからではなく、元気なうちから、話ができるときから望みを聞き、叶えていきます。「楽しかった」「美味しかった」などと語れる時間を大切に家族と過ごすことをサポートすることができるようになりました。

「ここで看取って良かった」「病院で最期を迎えるより住み慣れた場所で知っている人たちに囲まれて安心していたと思う」とご家族から言葉をいただきます。「いのち」と向き合う中で職員は多くのことを学びました。学びと経験が自信につながってきました。ご家族と職員が笑顔でおしゃべりしながら、お別れ会をする光景が見られるようになりました。職員だけでなく、ご家族も一緒に最期まで、ご本人のことを考えて向き合った結果であり、悔いを残さないと実感しています。

今現在、ご家族も日々の生活を支えるチームの一員となって一緒に悩み、暮らしを支えています。

《定義と考え方》

看取りとは

- ・病人のそばにいて世話をすること
- ・死期まで見守り看病すること
- ・介護

【辞書】

いろいろな場所で
様々な形で

「看取り」という言葉が使われる

看取り介護とは

【介護保険関係】

近い将来、死が避けられないとされた人に対し、
身体的苦痛や精神的苦痛を緩和・軽減するとともに
人生の最期まで尊厳ある生活を支援すること

特養の看取り介護対象者とは

医学的知見に基づき回復の見込みがないと
診断した者

<p>看取り介護加算の算定要件で管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設基準 看取り介護の委員会で管理 ・対象者基準 ・指針の作成、説明と同意 ・職員研修、説明と同意 ・ケアプランなどの必要事項 <p>●家族との連携 = 家族が後悔しない支援</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>多くの特養では…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居者 100 名 ・平均 2 週間に 1 人が死亡退去 </div>	<p>家族との勉強会・個別相談会を重ねてきました</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族と一緒に考える ・「生き方と死に方」を早い時期から相談 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>家族と一緒に日々を楽しく暮らせるようになった</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">環境を整え</p> <p style="text-align: center;">望みを叶えて、最期まで生きる</p> </div> <p>それが「看取りを援助する」ということ</p>
--	--

「看取り」は死ぬときのことというイメージが強い。医療の現場では死亡診断という意味合いが多いが我々がやっている生活の場で使っている看取りは介護保険が示しています。平成 25 年のフォーラムで、平成 27 年の介護報酬改定のために定義化しました。ここから見ると最期の時期の生活の継続のことだと分かります。

特養では看取り介護の加算算定要件（国の基準）45 日に対して報酬が付きます。ということは最後の 45 日間で特養の看取り介護の期間ということになります。特養の介護対象者の定義は国が最初から定めていて医師の診断が必要。概ね算定要件は施設ごとに委員会を作り、指針を作り、家族の同意を得て認められます。特養の指針は利用者が入居した時点で作成し、利用者の同意を得るようなルールになっています。現在、北ひろしま福祉会の障がい分野では、私たちが、そろそろ看取り介護の対象と判断した時点で指針を示し説明するようにしています。

国の制度が認めている特養での看取り介護では、家族との連携が強く求められています。具体的にどうすればよいか。「東部緑の苑」では職員が家族と一緒に勉強し、試行錯誤しながら一緒に相談できるようになりました。やはり、家族と一緒にチームになってやっていくしかありません。

<p style="text-align: center;">なぜ？</p> <p>障がい者支援施設では看取りができないの？</p> <p>そんな悔しさを感じながら…</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>介護保険が認めている「看取り介護」 そのルールに則ってやってみよう</p> <p style="text-align: center;">個別の支援</p> </div>	<p style="text-align: center;">必要に迫られて看取ることに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療で治せない状態が、40 歳代のお体に… ・長年暮らした「もうひとつの家」には支援の力がある <p style="text-align: center;">↓</p> <p>家族と一緒に決めた施設での看取り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃から話す機会が多い家族 ・覚悟を決めて、10 日間 <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">「施設で最期まで支えたい」 準備を整えれば……できた</p> </div>
---	---

障がい者支援施設「とみがおか」の取り組み ～「とみがおか」が大切にしていること～

対象となった方が亡くなったのは2年前の10月。障がい施設で看取り支援を行うとは考えもしなかったという職員が大多数。というのも利用者は若い方が多く、日常の中で死というものを連想したり、考えたりすることは少ないからです。

なぜ、看取りを行うことになったか。それは、ご本人の半生ほとんどが「とみがおか」の施設だったからです。ご本人が望む最後の選択肢は「とみがおか」ではないかと。ご本人とご家族に提案しました。そのときは「ご本人・ご家族が望むならやるぞ」という施設長の独断についていったという状況で、不安だらけの毎日だったけれども、今となっては最期の場所として選んでいただいたという事実が誇りに思えるようになりました。

最期を迎えるまでの時間は限りなく少なかったです。2年前の9月24日に病名が分かったと同時に余命宣告を受け10月4日死亡。わずか10日間でしたが本人の望む生活をと、病状が思わしくない中でも自宅へ帰省。好きな食べ物。好きな場所での遊び。お母様との旅行もでき、良い思い出となりました。最期のときは髭を剃り、着替えをし、家族で過ごし、昔を語り合えた。

「まだ、いろいろやってあげられたのでは」と後悔の気持ちも職員たちにはありました。

そんな経緯を踏まえ、今の「とみがおか」の看取り援助に対する考えは「毎日を大切にする」ということです。人の死はいつ訪れるか分かりません。本人も職員も後悔なくということが大切です。具体的には意思決定支援が重要で、それぞれの思いに寄り添いが実現できるよう支援すること。その思いが詰まったものが個別支援計画書になっています。私たちは利用者の望むことを最大限バックアップします。「とみがおか」以外の生活を選択するなら、それも応援します。選ぶ選択肢がないことは本人の可能性を奪うことになるので、様々な可能性・秘めた想いも大切に、経験を生かして支援します。

看取り援助推進活動 ①

障がい入所施設から取り組み開始(2021年度)

1. 介護保険「特別養護老人ホームの看取り介護」を
仕組み作りの基本にしました
介護保険「看取り介護」の制度要件に準じる(根拠)
 - ・利用者、職員、社会の理解が得やすい
 - ・法人内「特養の実践」を活用できる
2. 看取り援助に関する障がい分野の基本指針の策定
3. 活動スローガン
“すべての人の「生きる」を支えます”

望みを叶えて生きるための個別支援



生活の延長線上にある「死」を見据えた個別支援計画

誰が決めるの?

誰が責任を取るの?

家族と共に最期の準備も始めていこう

日々の支援は職員が得意

意思決定は家族と一緒に

障がい者支援施設「共栄」の取り組み ～そこが私の暮らす場所～

令和3年2月に亡くなった利用者様の看取り援助を通し「共栄」を人生の最期の場所と決めて、お見送りをさせていただきました。ご本人は幼少から46年間「共栄」で過ごされました。

令和元年6月、「乳がん」が見つかり3年間治療しての闘病。令和3年6月に骨・臓器に転移があり治療困難で医師からも積極的な治療を続けるかの選択を求められました。ご本人とご家族は、苦しい治療を避け最期まで自分らしく時間を過ごすことを選択しました。積極的な治療をしないこと。治らない病気であること。施設としてどのように関わっていくのかを考え、ご本人が最期まで生ききることを支援するよう方針をシフトしました。ここが看取りを考えたタイミングとなりました。

令和4年2月、当初の見込みより急激に病気が進行し、辛そうな時間が多くなり、主治医からも余命を宣告されました。私たちにとってもショックが大きい時間となりました。余命宣告を受け、看取り援助の時間を加速することとなりましたが、ご本人がどう思っているのか、ご家族がどう思っているのかを確認し、ご本人が自分らしさを一番表現できるのが「共栄」であること。ご家族としても「共栄」で最期まで看取ってほしい意向であることから看取り援助をスタートさせました。

- ・ 医者との契約→札幌南徳洲会病院系列のホームケアクリニック札幌
- ・ 訪問医療体制の整備→看護ケア 訪問看護ステーション
- ・ 施設の看取り援助の同意→看取り援助に関する障がい分野の説明
- ・ 看取り援助に対する同意書への署名→正式に「共栄」で看取れる環境
- ・ エンディングノートの作成→ご逝去後の要望や希望の再確認など
- ・ 担当者を招集した担当者会議→目的意識の共有、役割の確認
- ・ 個別支援計画の変更→必要なケアや今の思いを記した内容
- ・ 体調をサポートする環境→必要機材の確保

「実家に帰省したい」…小さい頃から共栄で暮らして正月など実家への帰省を楽しみにしていたので体調を整えるため数日入院して実現しました。

「温泉に行きたい」…2月10日、大きなお風呂に入りたいという希望だったので看護師も同行して最寄りの温泉に行き、実現。ビールと枝豆も堪能し、すごく楽しそうな笑顔。

「大きなケーキを食べたい」…2月11日、サプライズで早めの誕生会。ケーキを特注。

2月14日、朝から眠っている時間が長くなり、おしゃべりも難しくなりました。「共栄」のスタッフの力を借りて最後の入浴。その日の夕方、ご家族にも連絡。19時から担当職員がマニキュアを塗っているときに呼吸停止。管理職が立ち合い医師から死亡診断書をもらい、エンジェルケア・お化粧品をして過ごされました。

2月15日、朝から一緒に過ごした仲間も立ち合い、ロビーでお別れ会。セレモニーを終え葬儀場スタッフと「共栄」を後にしました。

退所手続き→3週間後。偲びのカンファレンス→ご本人を偲ぶ会。ご本人を偲ぶことやサービスの質向上を図るための会議では、施設での看取りに対して不安・心配・恐怖などが軽減されたこと。ご本人の生ききる姿勢に触発され、その姿に協力しようという職員が多かったこと。生ききる姿に賛同し職員間の結束が強まったことなどの意見があげられました。手順に沿って看取り援助を実践。ご本人の命を通して学んだことを実践できた。「共栄」のみならず「北ひろしま福祉会」でも、住み慣れた場所での最期を全力でサポートできるよう、今後もサービスの質の向上を目指します。

<p>ご本人は 医療の力では「治らない」の診断を受け 「生きる」ことをチームで選択しました</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">医師との約束 看取り援助の同意</p> <p>共栄で最期の日を迎える準備が整った</p> <p>支援目標: 今の時間をご本人らしく生ききって欲しい</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">家族と協力して生きる力を支えました</p> <p>これが「看取りを援助する」ということ</p>	<p>生ききった後に最期の日がくる</p> <p>呼吸が止まる瞬間だけを「看取り」と考えません</p> <p>そこに至るまでの時間を大切にします</p> <p>ご本人は、いのちの時間を生ききり 人生のゴールテープを切りました</p> <p>=== 準備が間に合ってよかった ===</p> <p>=== 痛みが強くならず…よかった ===</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">ちなみに 障がいを持って生きる方は… 実年齢、プラス10歳から15歳と言われます 「高齢」「老衰」への準備も早めの対応が必要です</p>
--	--

本物の家族と共栄の家族たち お別れ会、お見送り、人生を褒め称えました

ありがとう! ありがとう! ありがとう!

ご本人に支えられ、ご家族誰に支えられ…看取り援助を達成できました

「いのち」に学び、チームで支えた

教わったことを これからの支援につないでいきます

「生きる」ことをチームでサポート。そこに至るまでの時間を大切にします。

看取りという覚悟ができていたから実現できました。治すという医療のもとでは、この覚悟は持てません。病院では安静にしていた方がよいという。私たちは“がん”という治らない状況でも、ご本人の人生と向き合います。でも、やることは一緒。生きることをチームで選択し体制を整えました。死亡診断に来てくれる医者をちゃんと整えていなければなりません。家で亡くなったとき、死亡診断に来てくれる医者が決まっていなければ警察が関与することになります。日本の医療制度の下では、これは絶対。これは悪いことではない。だけど準備さえ整えておけば呼吸が止まったとき救急車で搬送せず、ちゃんと医者が来てくれて死亡診断してくれます。だから事前に準備しておきませんかということ。看取りを援助するということです。

ご本人は生ききった後に最期の日が来ました。ただ呼吸が止まるそのときを看取りのときとは言いません。そこに至るまでの時間を大事にし、看取りを援助することができました。“がん”という病気を持っていると、いろんなことが体に起きてきます。57歳のご本人と、“がん”の痛みがもっと強く表れたときは病院に行こうという約束がありました。幸い自分でコントロールできる範囲内で収めることができました。いつも来てくれた家族。46年間一緒に過ごした仲間たちとお別れ会。お見送り。ここに我々は価値を持ちます。

一般の人々は常識的に亡くなる時は病院でと普通に思っています。病院の死と私たち看取り援助の差別化のためにも、お別れ会とお見送り、この人は生ききりました。正々堂々と生ききりました。だから今日はおめでたいと。そういうお別れ会をみんなで行き、人生を褒めたたえます。ご本人とご家族に支えられ、看取り援助を達成することができました。職員だけでは何もできませんでした。

「この命に学んだ。教わったことをこれからの支援に生かす」と言っている職員を私は力強く感じています。

看取り援助推進活動 ②

人生最期まで個別支援を**継続**できる法人でありたい
せつかくの人生、「今」できることを叶えていきましょう
ご利用者の幸せをご家族と共に支えていきたい



老化を含め医療で治せない看取りの時期が訪れます

準備

1. その時のことを**考えてみる**
2. 人の話を**聞いてみる**
3. **関係者と話してみる**

本人にとって、**最善**の意思決定を導くため

私たちが学びながら進めます

職員の教育の一例【看取り援助に関する基本指針より】

1. 看取り援助の考え方の理解
2. 死生観教育
3. 人生最期の時に起こりうる機能的・精神的変化への対応
4. 臨終時対応
5. 看取り援助実施にあたり**チーム支援**の充実
6. **ご家族支援のための勉強会**
7. 看取り援助についての検討会
8. **意思決定支援**の考え方(意思、意向確認方法)
9. 個別支援計画の考え方(アセスメント、記録方法)

など

ご本人と共に生きました

担当支援員のお別れの挨拶 **「この仕事についてよかったです」**

「ご本人」が職員を支え、育ててくれました

ご家族はどう感じていたのでしょうか？

＜妹さん 家族の想い＞

妹さんの想い（要旨）

昭和 50 年「とみがおか」から 11 歳で「共栄」に入所。46 年間過ごしました。
家族から離され、帰省は年 2 回。最初は施設に戻るとき、泣いてぐずっていました。
数年経って慣れてくると、担当職員の顔を見るなり安心して、嬉しそうにしていました。
たくさんの写真や丁寧な個別支援計画で、職員の誠意や暖かさを感じ信頼していました。
3 年前「がん宣告」以降、治療・支援の方針を相談し、看取り支援に具体的に取り組みました。
今年に入り病状悪化。予想以上に病状が悪化する中、職員は本人の希望を全力で叶えてくれました。
施設で初めての看取りは大変だったと思います。本当にしっかり取り組んでくれて感謝しています。
自分の部屋で穏やかに仲間と囲まれての最期。本当に幸せだったと思います。

妹さんの手紙 ～本日、出席された皆様に向けて～

私はあらためて「共栄」で看取りをしてもらい、心からありがたいと思います。
皆様も話しにくいことでも、どんなことでも施設の人と話してみてください。

病気治療の中、本人は意思決定することが難しく、治療するのか、しないのか。本人が辛くないよう治療を断念する判断をする役目を家族として担いました。それは離れていても家族ができる役目。

家族が満足するように、後悔しないように、できるだけ家族も参加することが必要。

コロナ禍のように何かあるかわからない世の中。そんな中で誕生した本人の最期のときまでを支援してくれる看取り援助。私は施設の人と話をして本当に安心できました。ぜひ、逃げずに何でも相談してみてください。施設の人たちは私たち家族のことまで思ってください。

この活動が広がっていくことを心から祈ります。

【ご本人と共に生きた支援員の想い】

看取りって何だろう。何をしたらいいんだろうと始めは思っていました。

何度も「これでいいのかな」と思うこともありました。

ご本人の想いの実現を行っているときは「もっと、これができるんじゃないか」と思うこともありました

（呼吸を止めた後の）最期のご本人の笑っているような表情を見て、初めて「これで良かったんだ」と思いました。

「看取り」は死ぬ間際の話ではなく、ご本人が生ききるためのお手伝いだったのだと分かりました。

【ご本人のいのちに学んだ支援員たち】

本人の望みを叶えることが

看取りだったんだ！

これは一人で行えることではなく、

ご本人、ご家族、病院、支援員すべての

人たちが協力して進めていくものだと思います

看取り援助の活動としては、とにかく人生最後まで個別支援を継続できる法人でありたいと我々は活動を進めています。

せっかくの人生、今できることを先ず叶える。誰もが医療では治せない看取りの時期が来ます。そのための準備を進めようという活動。

特に関係者と話すことが大切。自分の思いを言葉に出す。伝えてみる。相手のことも聞いてみる。

そういう風に少しずつ準備して、ご本人にとって最善の意思決定を導く準備を始めていきましょう。

基本指針のなかに載っている職員の教育の例などのように私たちも学びながら進めます。

北ひろしま福祉会「共栄」は、ご本人と一緒に生きました。

担当職員がお別れの正面玄関の挨拶で「この仕事に就いてよかったです」と話していた。利用者さんが息を引き取り、もう動けなくなってしまった。とても悲しかった。

それでも、「この仕事に就いてよかったです」と思えたのは、一緒に寄り添ってくれた家族の方たちからのありがとうだったと私は思いました。

そして、ご本人が職員を支え育ててくれました。

<p style="text-align: center;">いのちから学ぶ</p> <p>支援の内容、手記すべきことは、一人ずつ異なる 「いのちが終わるまでの支援」を職員たちは学んでいます</p> <p style="text-align: center;">看取りは、特例ではない「特別」</p> <p>「最期」限りある「いのちの時間」を生ききる 命がけの個別支援 = 病院ではできないアレもコレも…</p> <p style="text-align: center;">「生きる」ための看取り援助</p> <p>人生の最期まで尊厳ある生活を支援すること</p>	<p style="text-align: center;">看取り援助の同意を交わすタイミング…</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">医学的知見に基づき回復の見込みがないと診断した者</p> <p>同意後も、本人はトコトン生きる ← 支援員たちは 生ききる力を援助し続ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・叶えられる望みを叶える ・家族も後悔しないよう ・職員も後悔しないように… <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>目線が 看取りだから できること</p> </div> <p style="text-align: center; border: 1px solid red; padding: 5px;">終わりよければすべてよし</p>
--	--

<p>本人の意思が確認できない悩み…</p> <p>本人にとって最善の意思決定をチームで導き出す</p> <table border="1" style="margin: 10px auto;"> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">家族の見解</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">本人の 意思</td> <td style="text-align: center;">+ + →</td> <td style="text-align: center;">最善の 意思決定</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">多職種チームの見解</td> <td></td> </tr> </table>		家族の見解		本人の 意思	+ + →	最善の 意思決定		多職種チームの見解		<p style="text-align: center;">看取り援助を推進するって？</p> <p>いのちの話ができる関係になる：家族と職員</p> <p>「誰かに聞いて欲しかった…」と</p> <p style="border: 1px solid red; padding: 2px;">！時間、話し続けたご家族…</p> <div style="border: 1px solid red; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">時代は変化しています いえ 社会を変化させていきましょう きっと 皆さんの施設の方々もそう思っていると信じます</p> </div>
	家族の見解									
本人の 意思	+ + →	最善の 意思決定								
	多職種チームの見解									

みんなで相談して導き出していく。そのためには本人の意思を聞いたり感じたり、支援員たちは日々の生活の中から、いっぱい見つけ出しています。決断しなければならないときが来たら、その材料を並べて本人にとって最善の決定をする。早いうちから看取りの契約をするということではありません。みんなで、そのときに決めていくということです。ちゃんと本音の話ができるようになりたい。そこから出発。

社会を変化させていくのも私たちと家族の責任。皆様の施設の職員もそう思っていると思います。

私たちの施設には、たくさんの施設利用者がいます。グループホームでも看取りをやっていこうと動き出しています。そんな北ひろしま福祉会の取り組みを、また、ご報告できる日を楽しみにしています。

このような取り組みを聞いていただける機会をいただき、ありがとうございます。

生ききるための看取り援助

私たちが目指す看取り援助 ～生ききる「いのち」に学ぶ～

※動画、写真以外の部分を資料提供いたします

社会福祉法人 北ひろしま福祉会 看取り援助推進委員会

小林 悦子

※※閉会※※（安田事務局長）

「北ひろしま福祉会」のスタッフの方々にあらためて感謝の言葉を述べました。

会場から感謝の拍手が沸き起こりました。

後半から駆けつけてくださった中野渡道議会議員に閉会の挨拶をお願いしました。

※※挨拶※※（北海道議会議員 中野渡 志穂 様）

入所施設を利用している家族を思いながら、「北ひろしま福祉会 共栄」の取り組みを聞いて感動しました。一人を、ここまで大切にでききる。チームで専門性を最大限発揮して最後の最後まで力強く「生ききる」を支えていく取り組みが素晴らしい。

また、これは大きな宿題でもあります。現状、どこでもできることではありません。

この素晴らしい取り組みをしっかりと、お伝えさせていただきます。環境面も整え、医療も含め、大きなチームとなって社会全体に温かい福祉の拡充が進むよう、私の立場からも取り組んでいきます。

※※編集後記※※

北ひろしま福祉会のスタッフの方々には本当にお世話になりました。

会場の皆様の感動が伝わってきました。

これからもタイムリーなテーマで研修会を開催したいと思います。

皆様のご意見・ご要望をお待ちしております。

【北海道知的障がい児・者家族会連合会 会報「ほっと37号」発行責任者：会長 近藤 正】

※※※※※※※※※※※※※※※※